

第1回講演会開催

学会の初めての講演会を開催しました。琉球弧世界遺産学会と沖縄スリランカ友好協会の共催です。一部は1月31日(土)3時から沖縄大学の教室で、二部は調理室で実施。一部は講演会、二部は料理&スリランカ舞踊。参加者数は、一部は35人、二部は40人。予想通り!?料理の方が人気を集めました。一部参加者のなかから10人の学会入会者がありました。二部はスリランカからの留学生による歓迎の舞(一人踊り)が注目の的でした。感動して、写真を撮るのを忘れた人もいました。



セノーテに訪れる奇跡の光

これは新聞投稿用の當眞会長の原稿です。「命の水」がスリランカにも沖縄にも共通する指摘が貴重です；「琉球弧歴史の道」への誘い

道は昔から人々や文物の交流の舞台を演出してきたばかりでなく、われわれの生活様式や物の考え方に大きな影響を与え、政治・経済・文化的な役割を大きく担ってきた。今回、琉球弧世界遺産学会では、各地との文化交流の歴史や世界遺産などの研究を行っている沖縄大学地域研究所「琉球弧歴史の道」研究班と合同で「琉球弧歴史の道」をテーマに講演会を開催する。

その第一部では3つのテーマが設定されている、その一つは「沖縄奄美の映像祭」に出品され絶賛を受けた作品の一つ「チャンドララル氏と八重山を歩く」が上映される。作品は、石垣ケーブルテレビの緒方報道部長とチャンドララル氏沖縄大学副学長の両氏が、奄美からはじまる琉球弧歴史の道の終着点八重山を旅し、過去の水問題から湧水対策のヒントを得るため井泉や御嶽を訪ね歩くのを映像化したものである。チャンドララル氏はスリランカ出身で現地の水問題に取り組んでいる。湧水対策の課題は何も沖縄ばかりではない。農業国スリランカも同じだ。世界遺産で有名な仏歯寺での祭りには仏歯が行列の先頭にたつ。仏歯は雨をもたらすとされる。つまり琉球弧の「雨乞い」の儀式を彷彿とするものだ。

2つのテーマは當眞が分担する「琉球のグスク」である。琉球弧の島々には500か所以上のグスクが存在するとされる。2000年の暮、その中から5つのグスクが世界遺産として世界文化遺産に登録された。琉球歴史が詰まったこれらのグスクの縄張図を読み解くことでその謎に迫っていく。

3つ目は花井正光氏による「世界遺産に学ぶ」がテーマである。花井氏は琉球大学観光産業科学部教授を経て、現在 NPO 法人沖縄エコツーリズム推進協議会会長である。保全生態学と文化財保存学が専門。沖縄におけるエコツーリズムの推進や持続可能な観光地づくりを通し、現在、本琉球弧世界遺産学会の副会長であり、環境保全と経済振興の調和がとれた島嶼社会を形成するための活動を精力的におこなっている方である。今回は地域遺産の保全と活用の視点から沖縄の世界遺産について講演することになっている。

第二部では少々趣向を変えてスリランカ水プロジェクト支援チャリティバザールを開く。ここでは、スリランカの山村における水供給支援活動を紹介し、同国からの留学生によるスリランカ料理を楽しむことになっている。多くのご参加をお願いする。

世界遺産講座その1 世界遺産に学ぶ地域遺産の保全と活用

花井 正光（琉球弧世界遺産学会副会長）

世界遺産条約ができて既に40余年。この間世界遺産リストに登録された世界遺産は今年1000件を突破し、その数1007件にまで増えました。年平均で20数件のペースで増えてきたこととなります。登録件数の増加で、登録世界遺産をもつ国が確かに増えはしましたが、国による登録件数の大きな開きは相変わらず解消されていません。ここ20年ほど格差是正のための工夫がなされ、新たな類型の世界遺産が登録されるようになりましたが、世界の地域や国を通じて世界遺産が万遍なく広がるにはなお時間がかかりそうです。

ところで、近年、史跡をはじめとする指定文化財の保存や整備・活用の考え方に新たな手法が加わりつつあることにお気づきでしょうか。地方自治体が取り組む事業においてもこれまでと様相の異なる事例が目立つようになってきました。この動向は、国内では21世紀を迎えた頃から加速したもので、ざっと言うと、地域に所在する多様な文化財を個々に捉えるのではなく、カテゴリーの異なる文化財を、文化や自然環境も含め包括的、統合的に広く捉えて「地域遺産」として理解し、社会・経済・自然環境にかかわる地域の社会生活と一体化させ、現代社会の課題に立ち向かい、現在および将来の世代にとって良好な地域社会の創出のツールのひとつにする取り組みとみてよいでしょう。

この取り組みの考え方は、地域遺産を社会生活において現代的役割を持たせることで持続可能な発展に資そうとする世界遺産条約の精神と、実は軌を一にするものなのです。1960年代に加速した技術革新の普及が地球規模で貴重な遺産を破壊し、喪失し、人類の存続までもが脅かされるまでの危機的状況を背景に、この事態の回避策のひとつとなることを目指し国際的合意によりできたのが世界遺産条約でした。条約の前文にそうした背景や目標が簡潔に表現されています。

さて、「顕著な普遍的価値」を有する人類共通の宝を守り、将来世代に継承することに目標をおく世界遺産の仕組みは、遺産を地域社会の運営や課題解決に活かし、文化財の保全と活用を計画し実行する施策決定者にとって示唆に富むと考えられます。適切な保全・保護を担保するためのルールを始め、本条約の普及啓発に欠かせない地域への配慮や新たなカテゴリーの創出など、地域遺産の保全にとっても学ぶべき点が少なくないのです。

また、国内でも新たな文化財として普及しつつある文化的景観も世界遺産にその祖を求めることができます。人の営みとその所産としての有形、無形の遺産を地域遺産として土地の自然と一体的に捉え、地域固有の文化や歴史を理解しようとする文化的景観は、地域の持続可能な発展をめざす取り組みのツールとしての役割を担えるのではないかと期待されています。

これからの地域遺産の保全と活用の視点として、世界遺産の変遷や保存管理の手法に学ぶべきところが多いことについて考えてみたいと思います。

世界遺産条約の概要

正式名称：世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約

採択：1972年11月（発効：1975年12月）
締約国数：191か国・地域(2014年8月現在)
日本の加盟：1992年9月

条約の目的：顕著で普遍的な価値を有する遺跡や自然地域などを人類全体のための世界の遺産として保護、保存し、国際的な協力及び援助の体制を確立する。

内容：①保護を図るべき遺産の一覧表を作成し、締約国の拠出金から成る世界遺産基金により、各国が行う保護対策を援助する。②締約国は、自国の自然等の中から遺産を認定し区域を定めるとともに、自国及び他国の遺産を保護する等の努力義務を負う。

執行機関：世界遺産委員会
事務局：ユネスコ世界遺産センター（パリ）
諮問機関：ICOMOS、ICCROM、IUCN

課題：①遺産登録数における地域的不均衡を是正し、世界の多様な文化を反映し代表する、信頼性のある世界遺産リストとするための取組み

持続可能な発展の概念

将来世代が自らの必要性を満たす能力を損なうことなく、現在世代の必要性を満たすような発展を意味する。

Brundtland Commission (1987)
大来佐武郎監訳 (1987)：『地球の未来を守るために』

地球環境時代における地域の課題

- 持続可能な発展（環境・経済・社会）
- 循環型社会の構築
- 生物多様性の保全
- 自然の再生（回復、復元）
- 伝統的地域文化（文化の多様性）の再評価
- 多様な主体による協働

生物多様性を脅かす4つの危機

第1の危機

人為に由来する種（個体数）の減少・絶滅、生態系の破壊・分断
結果：絶滅種の増加、生息地の喪失、近親交配による個体群の劣化

第2の危機

自然に対する人の干渉の減少に伴う里山や草原の荒廃
結果：里山・里地の生態系の変化 → 生息環境の喪失、絶滅危惧種の増加

第3の危機

移入種や化学物質による影響の増大
結果：生態系の変化、在来種（固有種）の減少

第4の危機
地球温暖化

新たな文化財保護の考え方の台頭とその背景

1. 文化的景観の保存と活用
地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地の保存により、地域アイデンティティの確立や地域の誇りが増大する。
2. 関連文化財群としての地域遺産の保存と活用
有形・無形の文化財を、歴史的関連性や地域的関連性などに基づいて、「相互に関連性のある一定のまとまり」（「関連文化財群」）としてとらえ、地域の歴史や文化を語る重要な地域の資産として、総合的に保存・活用を図る。

（台頭の背景）

社会構造や価値観の変化、特に、過疎化や少子高齢化などにより、歴史的な建造物、文化的景観、遺跡、地域に伝わるまつりや行事など、長い歴史の中で伝えられ、保存されてきた有形・無形の文化財や、伝統的な知恵や技術が失われつつある。

このような状況にあって人々が生活の中で文化財を守り、その根底にある伝統的な知恵や技術を継承することによって、日々の暮らしがより豊かになるような方策を講じていくことが求められている。

（文化審議会文化財分科会企画調査会報告書2007、1p.）

関連文化財群の構成文化財のイメージ



出典：文化庁文化財部作成パンフレット

関連文化財群の保存・活用で期待される効果

- ① 多様な文化財の価値の顕在化による適切な保存・活用の助長
地域に潜在している文化財を見つけ出し、開発や老朽化による消失を未然に防ぐことができ、個別の文化財保護の枠組みの中では見落とされがちな文化財の多様な意義や価値、保護の必要性が明らかになることで、それらの一体的な保存を可能にする。
- ② 文化財を核とした地域の魅力の増進
有形・無形の文化財を、歴史的関連性や地域的関連性などに基づいて、「相互に関連性のある一定のまとまり（「関連文化財群」）」としてとらえ、地域の歴史や文化を語る重要な資産として総合的に保存・活用を行うことで、伝統文化の継承に加え、地域のアイデンティティの確保につながることから、地域の魅力の増進と活力の向上への寄与が期待できる。
- ③ 地域との連携協力の推進
自らが住む地域の歴史やその中で生まれはぐくまれてきた文化的所産が、一定の関連性を伴って分かりやすく住民に示され、地域への理解を深め、誇りを高めることにつながるから、住民の文化財保護活動への参加や、地域の企業から協力を促す効果が期待できる。
- ④ 他の行政分野との連携の促進
地域についての行政計画と緊密に関わることから、行政分野間での連携や整合性が図れ、実効性を伴った文化財の保護体制の組織化が期待できる。

文化財分科会企画調査会報告書2007、一部改変)

世界遺産に学びたい遺産の保全と活用の手立て

まもるべき遺産の拡張（グローバルストラテジー1994）

- 1 従来の一覧表には十分に反映されてこなかった分野における遺産の登録を推進すること
 - 例 ① 産業遺産の導入
人類の科学技術の発展と産業活動の進展の成果を例証するもの
 - ② 20世紀の建築
新しい時代の資産を代表するもの
 - ③ 文化的景観
文化と自然の中間的存在/人類と地球との共生
- 2 遺産の普遍的価値を地域的な文脈の中で評価すべきこと
- 3 民族的な風習や信仰など無形の部分をも視野に入れた幅広い評価が求められること
- 4 文化と資産の双方の多様性を踏まえた評価の方策が求められること

文化遺産及び自然遺産の国内的保護に関する勧告の前文の一部抜粋（仮訳）

1972年11月16日 第17回コネスコ総会採択

生活条件が加速度的に変化する社会においては、自然との接触及び過去の世代が残した文明の証跡との接触を保つことのできる適切な生活環境を保存することが人類の均衡及び発展のために欠くことができないものであり、このため、地域社会において文化及び自然の遺産に積極的な役割を与えること並びに現代の所産、過去の価値あるもの及び自然の美を総合政策の中に統合することが適当であることを考慮し、

社会生活及び経済生活へのそのような統合があらゆる段階における地域開発及び国家計画の基本的なものの一でなければならないことを考慮し、

<http://www.mext.go.jp/unesco/009/004/012.pdf>

京都ビジョン（2012）



- 基本認識
- 持続可能な開発の追求との統合
 - コミュニティの役割の重要性の認識と人材養成の強化

国際社会への呼びかけ

- ・ 連帯と協力の精神に基づく、グローバルな規模での遺産の保存のための十分な財源の確保。
- ・ あらゆるレベルでの人材育成を含む、世界遺産と持続可能な開発の支援に向けて、コミュニティに関する経験、グッド・プラクティスと知識を共有するために、革新的な対応策を開発すること。
- ・ 世界の文化及び自然遺産への脅威に効果的に対応するための責任を分かち合い、その持続可能な開発と全体的利益のために貢献すること。
- ・ ポスト2015年開発目標の議論において、世界遺産を考慮に入れること。その際に、環境、文化及び社会経済に関わるニーズを考慮した包括的アプローチのために、世界各地域及びグローバルなレベルの全ての関連した会合において、国際社会を関与させること。
- ・ 遺産の保存が社会全体の持続可能な開発に資するよう、世界遺産に関わる全ての関係者の協力と連携を強化し、また、地域社会と先住民、専門家、青年が世界遺産への推薦段階から保存に参画できるようにすること。
- ・ 無形文化遺産、文化的・創造的産業など、重要な役割を果たす世界遺産以外の領域を通じて、地域社会の持続性を確保すること。
- ・ 世界遺産条約締約国会議において採択された「戦略的行動計画2012-2022」を優先的に実施すること。

ニューツーリズムに共通する特徴

- テーマ性
旅行者が自ら関心をもつテーマにそった観光にこだわる
- 地域性の重視
固有の資源を活用した自律的な観光（着地型商品）を選択する
- 参加・体験型
物見遊山でなく、体験ツアー・プログラムへの参加を重視する
- 地元との交流
旅行先の人々との交流を楽しむ
- 地域づくりへの貢献
観光による地域の振興や環境保全への寄与を重視する

世界遺産条約とともに持続可能な発展を期すための国際条約

ユネスコの条約など

- ・ 武力紛争の際の文化財の保護のための条約（1954）
- ・ 文化財の不法な輸入、輸出及び所有権移転を禁止し及び防止する手段に関する条約（1970）
- ・ 人間と生物圏（MAB）計画（1970）
- ・ 世界の記憶（Memory of the World）事業（1995）
- ・ 水中文化遺産の保護に関する条約（2001）
- ・ 無形文化遺産の保護に関する条約（2003）

その他の条約

- ・ 特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約（1971）
- ・ 絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約（1973）
- ・ 移動性野生動物種の保全に関する条約（1979）
- ・ 国連海洋法条約（1982）
- ・ 生物多様性に関する条約（1992）
- ・ 国連気候変動枠組条約（1992）

沖縄発「スリランカ命の水プロジェクト」

ディリープ・チャンドララール
(沖縄スリランカ友好協会会長、沖縄大学教授)

1. 北西部州 Belungala 村

私が最初にこの村を訪ねたのは、16年前である。当時大阪の聖母被昇女子短期大学で英語を教えていた。夏休みに実施したスタディツアーに学生を引率し、スリランカの貧しい村の実態を理解してもらう目的で日本の学生とスリランカの高校生が中心になり、村の各家を訪ねてアンケート調査を実施したのである。アンケートには村の歴史、現在と将来に関する質問があった。「村に必要なものは何ですか」という質問に対する村人の答えとして一番多かったのは、「水、水道」であった。それから16年たっても村人の希望が叶えられてないということは、悲しい。

村に伝わる伝説を高齢の方はある程度知っていたが、若者のなかにはまともに知っている人は少なかった。これをまとめて本の形にしたいというのが私の役目だと思った。3年前に「文芸社」によってシンハラ語、英語、日本語の三つの言語で『王への道』というタイトルでこの物語を出版することができた。私の夢を叶えさせて、村人と共有することができたが、村人の夢が叶えられないままということが、私の心に残っていた。彼らの問題は生活の原点にある水である。



2. プロジェクト立ち上げのきっかけと村の現状

昨年8月に、沖縄スリランカ友好協会主催のスリランカ歴史・文化・交流の旅の参加者は、ポルガハウエラ市バルンガラ村に立ち寄った。バルンガラ村は、スリランカの中中部（行政上では北西部州）にある農村で、市内のメイン道路から舗装されていない急斜面の山道を登った所にある。

山頂付近には150名ほどの人々が暮らしている。村の中には井戸が無く、山の中腹にある井戸から往復約2時間かけて生活に必要な水を女性、子供たちが運んでいた。それも決してきれいな水ではない。

その現状を見たときに、メンバーたちができることはないか？と考えた。そしてバルンガラ村までの水道設備を設置するプロジェクトを立ち上げることにした。

生活環境の改善に不可欠な水道整備について、これまでに村人が行政に対して整備をするよう要請を度々行っているが、実現されていない。通常なら水を確保し、浄水して住民に配るということを地域自治体の仕事であるが、Polgahawela市にその自治能力も資源管理能力もない。

現在水を汲んでいる井戸では水量が十分ではなく、さらに山を下りた所にある湧水まで行かねばならないこともある。

3. 「命の水プロジェクト」の必要性

村の中で水が供給されれば、水汲み時間の短縮による村人の生活水準の改善と貧困の削減に大きく貢献することとなるだろう。女性、子供たちの往復2時間の水汲み労働が軽減されることになり、就学、就労などにより経済活動が活発になることが期待される。きれいな飲み水がない、トイレがない、などの衛生上の問題の解決にもなる。

昨年のスリランカツアー参加メンバーが交流した村人たちの生活苦を知った今、この機会を逃さず、当協会が自ら行動することにした。

4. 事業の概要

1. 第一案 山の中腹での井戸の設置 → 村のコミュニティセンターであるお寺までの送水管設置
2. 第二案 政府水道庁と町の水道局の協力を得て、街の水溜タンクから水道を引くため、汲み上げポンプと電源設備の設置

第二案の場合、水道を引く距離が長く、下から山の上まで水を汲むためパワフルなモーターポンプと技術が必要なので、コストもやや高い。しかし、より多くの人に安全な水の提供ができる。水を効率よく村人のもとへ届けるのが私たちの課題である。そのために、何が 필요한のか、考え、調査した結果、村は岩ばかりで、井戸を掘っても水が出ないことが分かった。そこでプロジェクトを第二案中心に固めた。

5. 総事業費 150万円 → 180万円

最初は、スリランカでの事業費を100万円、沖縄での事業費を50万円として概算していたが、最終的見積もりによると、スリランカでの事業費だけで180万円になっている。不足額分を補うために今インターネット中心に資金を集めるキャンペーン「クラウドファンディング」を始めた。(別紙参照)

6. 水道設備完成後の維持管理、運営

2013年7月～2015年年末(2年5か月)を予定。事業完了の報告会をもってプロジェクトの完了とする。水道設備完成後には、維持管理と運営についてバルンガラ村のコミュニティセンターであるバルンガラ寺が中心となって村人が行う。

維持管理や運営に関するアドバイスをブライトムーンファンデーションが行う。

7. プロジェクトの体制

主体・・・沖縄スリランカ友好協会 会長ディリープ・チャンドララール

実行委員長・・・沖縄スリランカ友好協会 理事玉城恵美子

スリランカでの施工管理・・・Bright Moon Foundation (地元のNGO団体)

現地工事作業員・・・バルンガラ村人

バルンガラ村コーディネーター・・・バルンガラ寺 Gunarathana 僧侶

事業に関するアドバイザー・・・アジアチャイルドサポート、スリランカ政府水道庁

8. 私たちにできることと目指すもの

バルンガラ村のこの現状を知った時、参加者が沖縄の「結」(相互扶助)の精神で、行動を起こすことが大事だと気づいたことからこのプロジェクトが始まった。今までスリランカのことを学び交流してきたが、気づきを行動につなげるのに、大いに役立ったと思う。

さらに、これは村人から声があがってきて、できた住民参加型プロジェクトである。

このプロジェクトは結果だけではなく、そこにたどる過程も大事にしている。一昨年私たちが「スリランカ歴史・文化・交流の旅」で村を訪ねてから刺激を受けた村の小学生が自分の村をたたえる詩を書いて現地新聞に投稿した。今年もこの旅は8月29日に出発し、30日に村で行われる水を祝う行事に参加する予定がある。水道施設が完成すると同時に、自分の村を守り、住民参加型で「生命の原点」を支える共同体のモデルもできあがるかもしれない。その意味で子どもの詩も村の頂上までいく階段も非常に象徴的だと私は思う。

お母さんがお水を汲む時、私は辛くなる。
勉強するから手伝わなくてもいいといわれても
やっぱり落ち着かない。

家の水だけじゃない
隣のおばちゃんに熱がでた時は
かわりにお水を汲まなくちゃ。
もちろん、お寺の為のお水も汲むよ。

私も 村のみんなも
もっと元気になりたい
もっとキレイになりたい。
(Sanduni Meheana Ranaweera、7年生、
Lankadeepa 新聞)



世界自然遺産・知床の拡張構想

本間 浩昭 (NPO 法人北の海の動物センター 理事)

知床がユネスコの世界自然遺産に登録されて今年で 10 年。この遺産の範囲を北方四島の北隣のウルップ島まで拡張させようという構想がある。北方四島は日露が領有権を主張する係争地。政治的な問題で分断されている生態系を一つにつなげようという構想だ。NPO 法人日露平和公園協会 (理事長、午来昌・元斜里町長) が 2008 年から進めている。

「世界で最も南まで流氷が張り出している特異な生態系」。そう位置づけられたことを象徴するかのよう登録以降、流氷目当ての東南アジアからの観光客が目につく。「海が凍るなんて信じられない」と。

地図を見てみよう。北半球で海が凍るのは北緯 70 度あたりまでだが、知床はそれより緯度で 15 度以上も南まで張り出している。ウルップ島までの間に三つの海峡があり、これらが漏斗のこし口のようになって太平洋へ流れ出す。

当然のことながら、これらの島々の生態系は知床と同一である。シャチやラッコ、ゼニガタアザラシ、タンチョウ、オジロワシ、オオワシなどの野生動物も回遊や渡りをしている。「野生動物に国境はない」という現実を如実に物語る。

遺産にふさわしいかどうかを審査した国際自然保護連合 (IUCN) がユネスコに提出した『技術評価書』は「知床と近隣の諸島には、環境や生態に類似性があるのは明確である」と指摘した上で、「将来この地域を広範な『世界遺産平和公園』として発展させることも可能である」と提言している。拡張構想は、単なる夢物語ではない。IUCN の提言を具現化しようという取り組みなのである。

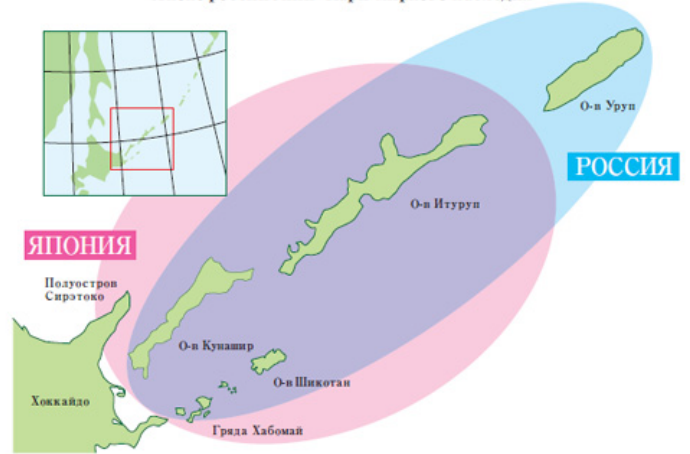
日露間には、戦後 70 年間、未解決の北方領土問題がある。ところが、これら係争の島々では現在、連邦政府とサハリン州政府が莫大な予算をつぎ込んで飛行場や港湾、地熱発電所の建設、道路網の整備など、急激な開発が進められている。

知床よりはるかに豊かな生態系を保持している原初の自然もこのままではずたずたになってしまいかねない。すでに水産資源は密漁と乱獲で枯渇寸前の状況に陥っている。



北海道根室市納沙布岬に現れた「手つなぎラッコ」
(2009 年 5 月)

(предложение) Проект расширения памятника Всемирного наследия Сираток:
Японо-российский Парк мирного наследия



NPO 法人日露平和公園協会が提唱する
知床の世界遺産拡張構想 (ロシア語版)

ところで、どうしてウルップ島までの拡張なのか。四島までの拡張案なら、ロシアは実効支配の現状を盾に拒否するだろう。そこで考えた。日本は知床から四島にかけて円を描き、ロシアはウルップ島から四島にかけて円を描く。ウルップ島まで一気に拡張し、係争地の四島を「共通項」としてしまえば、双方のメンツが立つ。

世界遺産条約第 11 条 3 は係争地の扱いについて、「2 以上の国が主権又は管轄権を主張している領域内に存在する物件を記載することは、その紛争の当事国の権利にいかなる影響をもたらすものではない」と定めており、両国が拡張に向けて共同歩調を取れば実現可能である。この豊かな自然がすり減ってしまわないように両国が手を携えるべきではないか。

拡張構想については <http://www.sea-otter.org/> に詳しい。

朝鮮通信使をユネスコ記憶遺産に登録を！

阿比留 正臣（対馬市観光交流商工課 課長補佐）

皆さんは、対馬を知っていますか？九州と韓半島の間には浮かぶ日本で3番目に大きな島です。韓国までの距離は50キロを切り、冬場の天気の良い日は、釜山の高層マンション群を肉眼で見る事ができるくらいです。

（写真は、釜山の夜景です。近くに見えるのは航空自衛隊のレーダー基地です。）

対馬は、地理的にも歴史的にも朝鮮半島との関係が深い島です。昭和初期には船を漕いで釜山まで買い物に行ったそうです。昔、学校で「江戸時代は鎖国で長崎の出島だけが開かれていた」と勉強しましたが、それは間違いです。長崎口に加え、対馬の朝鮮口、薩摩の琉球口、松前のアイヌ口が開かれていました。対馬藩は朝鮮人参など交易でかなり儲かっていたそうです。また、釜山の龍頭山一円に「倭館」という広大な敷地を借り受け、対馬藩の家中が500人暮らし、朝鮮王朝との交渉・貿易を行っていました。今では、その土地は国際市場などもあり、釜山市の有数の商業地域となっています。

さて、皆さんは「朝鮮通信使」を知っていますか？朝鮮通信使とは室町時代から朝鮮国から日本へ派遣された外交使節団です。秀吉の朝鮮出兵後、徳川家康の命令により対馬藩主「宗義智（そうよしとし）」公は10年の歳月をかけ、日朝関係の修復をはかり、朝鮮通信使の往来を復活させました。そして江戸時代の12回におよぶ招聘で、隣国と260年間の争いのない平和な時代を築いたのです。まさしく朝鮮通信使は平和の象徴なのです。しかし時代とともにその歴史は葬りさられることになるのですが、昭和53年、仮装行列からではありますが、対馬で発掘され、対馬で少しずつ拡がりをみせるようになりました。

1995年、対馬市を中心として、朝鮮通信使が対馬から江戸までを通るルートの自治体に声をかけ「朝鮮通信使縁地連絡協議会」（以降「縁地連」）を組織しました。今では、16の自治体、42の民間団体、110人の個人会員に発展しており、昨年9月にはNPO法人に移行しています。

縁地連は、これまで朝鮮通信使行列に関連する事業を推進しており、下関、釜山、瀬戸内市、静岡、京都等での行列の再現を支援しました。

2012年から朝鮮通信使をユネスコ記憶遺産に登録する活動を、縁地連のカウンターパートナーである釜山文化財団と日韓共同で行っております。縁地連内に下関市、静岡市、京都市等12自治体で組織する「朝鮮通信使ユネスコ記憶遺産日本推進部会」を組織し、その諮問機関として学術委員会も立ち上げました。現在は、来年3月の申請に向け、登録資産リストの選考作業を行っています。また、日韓共同学術会議を12月、1月に開催しています。通訳をしながらの会議ですから倍の時間がかかり大変です。しかし、韓国側の学者には日本語が堪能な方が多いのに驚かされます。共同会議が終わったあとの懇親会は、身振り手振りの会話で盛り上がります。

ご存じのとおり、今、日韓政府の関係は非常に冷え込んでいます。しかし、関係は良くなったり悪くなったりするものです。2015年は日韓国交正常化50周年を迎えます。この記念する年にこの事業を推進することは大きな意義があると思っています。そして関係修復の糸口になればと思っています。

これからは朝鮮通信使というキーワードに注目しておいてください。



写真左：対馬市での朝鮮通信使行列再現のようす
写真右：対馬から見た釜山市の夜景

インドネシアの世界遺産 ボロブドゥールの仏教寺院群

細田 尚子（日本旅行作家協会 会員）

世界最大級の仏教遺跡であるボロブドゥール寺院はジャワ島のジョグジャカルタにあります。770年頃～820年頃、大乘仏教を信仰するシャイレンドラ朝によって、漆喰や接着剤を使わずに石を交互に組み合わせた空積み構造の石造寺院が建造されました。

驚くことに、基壇の一辺が123m、高さが42mもの巨大な曼荼羅型の寺院は1814年に発掘されるまでの約1000年間、密林の中に埋もれていました。原因は、仏教寺院が完成した後に権力を握ったマタラム王国でヒンドゥー教が台頭したから。15世紀以降はイスラム教が定着したから。メラピー火山が噴火するたびに仏教を信仰する住民がこの地を離れたから。火山灰の上に草木が茂り、密林に覆われてしまったからなど諸説あります。



計504体の仏像が鎮座するボロブドゥール寺院

1907年からオランダが、1973年からはユネスコが大規模な修復を行い、日本のODAも支援し、1991年に世界遺産登録。2006年のジャワ島大地震被害の修復も進み、今では世界中からやってくる観光客に現地の学生が英語で声をかけるという課外授業の場となっています。

ボロブドゥール寺院の正面は平等院鳳凰堂と同様の東向きです。早朝4時半から日の出を見るため懐中電灯をたよりに東側の階段を登ると、頂上の大仏塔に着く頃には顔から汗が吹き出し、サウナにいるようでした。朝日が昇ると涼しい風に乗ってアザーン(イスラム教の祈り)が聴こえてきました。この瞬間「天と地と私がつながっている」と感じました。今まで100物件以上の世界遺産を旅していますが、こんな感覚は生まれて初めてでした。

曼荼羅の形を表している寺院の階段を登れば仏教の三界を疑似体験できると聞き、朝食後改めて訪問し、現地ガイドさんに説明してもらいました。

一番下の基壇は、煩惱のままに生きる「欲界」を表しています。「隠れた基壇」160面のうち修復が完成した4面の浮彫りは印象的でした。男性の享楽は「飲む、打つ、買う、麻薬、盗み」。女性の享楽は「うわさ話」。悪い事をすれば悪い結果が生じる悪因悪果は、身につまされました。



うわさ話をして口が歪んでしまった浮彫り

中央の5層構造の方壇は、物質世界から離れられない「色界」を表し、時計周りにお釈迦様の前世や仏教の様々な説話の浮彫りを見ることができました。

大仏塔に近い上層の3層構造の円壇は、物質世界を超越した「無色界」を表し、72の釣鐘型の小仏塔が規則正しく並び、目透かし格子から仏座像を拝むことができます。格子の形に注目してみましょう。正方形は精神が安定した賢者を、菱形は精神が不安定な俗界の人を表しています。中央の大仏塔に格子窓がないのは大乘仏教の真髓が「空」を表現しているからだそうです。

世界遺産ボロブドゥール仏教寺院を訪問し、煩惱だらけの私も「本質(マンダ)を得る(ラ)」という意味を知り、今の自分を見つめ直す機会を得たことは間違いありません。



釣鐘型の小仏塔の目透し格子



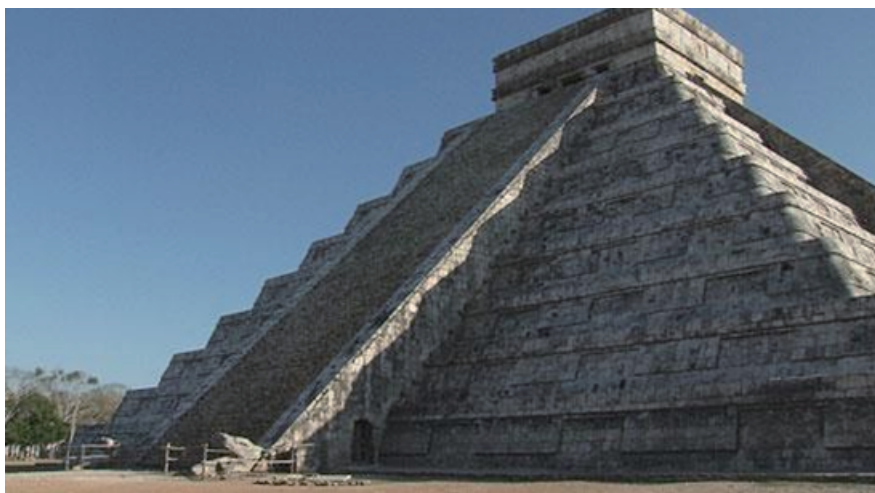
聖なる泉 セノーテ

小川 典 (オルタスジャパン ディレクター)

高度なマヤ文明

メキシコ湾とカリブ海との間に突き出るように位置する、ユカタン半島。メキシコ、グアテマラ、ベリーズの三ヶ国にまたがるこの場所は、古代マヤ文明が栄えた地として広く知られている。16世紀まで、3000年にも渡って栄華を誇ったこの文明がいかに高度だったかは、この地に残る最大の遺跡・チチェン・イツァーから知ることが出来る。高度な建築技術を駆使して建てられたピラミッドには、多くの秘密が隠されている。東西南北4面の階段の合計は364段。そこに最上階の神殿を足すと、365段と一年の日数になる。更に年に二回、春分の日と秋分の日の日没時、ピラミッドには、ヘビの胴体が浮かび上がり、階段の下にあるククルカン（マヤの最高神：羽毛のあるヘビ）の頭と繋がり、荘厳な景色が現れる（ククルカンの降臨）。

驚異的な天文知識を基に、太陽の動きに合わせて建造されたと考えられているチチェン・イツァーのピラミッド。しかしそこには、更に驚くべき秘密が隠されているという。壮大なマヤ文明の世界観を垣間みることが出来る奇跡の瞬間を求めて、メキシコ・ユカタン半島を訪れた。



「セノーテ」とマヤの関わり

ユカタン半島の北部、ジャングルが生い茂る大地には、3000以上の泉が点在している。石灰岩が隆起して出来たこの地域には河川が一本も無い為、まさにこれらの泉が、マヤの人々の生活を支える命の水源地だった。

「セノーテ」と呼ばれるこの泉は、彼らにとって、雨の神が宿ると信じられてきた特別な場所。セノーテの語源は「泉」を意味するマヤ語「ソノット」。ユカタン半島には、今もソノットの名前がついた村が残っていて、そこに暮らす人々とセノーテの深い関わりを知ることが出来る。

世界最長の水中洞窟

水が浸透しやすい石灰岩の大地。その下には、数百万年もの間、雨水の浸食を受けて形成された鍾乳洞が眠っている。氷河期の後、地下水の水位が上がり、鍾乳洞はそのままの姿で水の中に埋もれている。天井の一部が崩落することで、その場所が天然の井戸「セノーテ」になり、生きものが集まる場所になってしまう。セノーテの奥深くには、ゾウの祖先と言われるmastodonや石灰岩化した木の根等、様々な生命の痕跡を発見することが出来る。地下で網の目の様に複雑に繋がり、世界最長の水中洞窟を作り出しているセノーテ。そこには、今もまだ人類の想像が及ばないような未知なる世界が広がっている。

セノーテは地下世界への入り口

有史以来マヤ文明を支えて来たセノーテ。そこには、マヤ人の精神世界とも深い繋がりがあることが確認されている。天上・地上・地下、3つの世界の存在を信じていた古代マヤの人々。彼らにとって、死後復活して再び天上世界に戻る為に重要な意味を持つ場所が、地下世界であり、その入り口がセノーテだと信じていた。その証拠と言われているのが、セノーテの底で発見された様々な捧げ物。壺や翡翠、そして生け贄として捧げられたと思われる多くの人骨が、今も手つかずの状態で見つかる。

セノーテを訪れる奇跡の瞬間

生け贄や地下信仰、そしてアニミズムといった独特の世界観を持つ古代マヤの人々。そんな彼らが最も重要視したと言われているのが、チチェン・イツァー遺跡の中央に位置しているピラミッド。

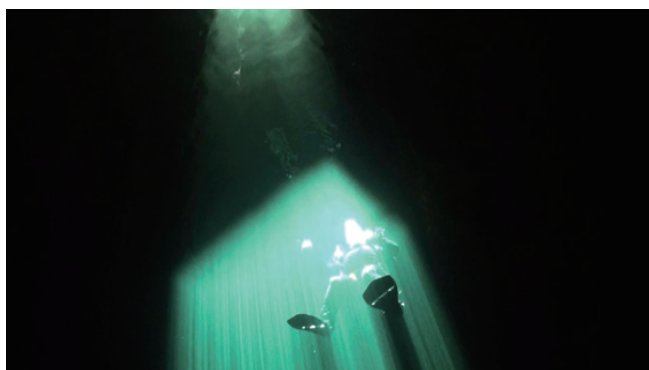
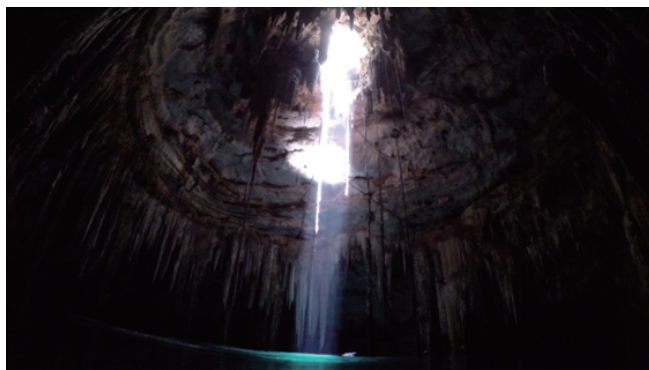
しかし近年、そのピラミッドとセノーテの驚くべき関わりが発見された。遺跡内のジャングルにある4つのセノーテを線で結ぶと、その対角線上にピラミッドが建てられていたことがわかった。更に、一年に2回、太陽がこのピラミッドの真上を通過する日、北西に位置するオルトゥン・セノーテの真上も通過することが確認された。古代マヤの人々は、太陽の軌道を把握し、遺跡の中にあるセノーテとピラミッドを象徴的に結びつけていた。



太陽の天頂通過日である5月23日(と7月19日)、オルトゥン・セノーテに潜水し、その瞬間をカメラで捉えてみた。太陽がセノーテの真上を通過する瞬間、果たしてセノーテの中を、一筋の光の筋が貫いた。その光の道は、50メートル下の水底まで照らし出し、さらに水面に射し込んだ光が、真直ぐに天に向けて跳ね返っていくという、神秘的な光景が訪れた。

天上・地上・地下という、マヤの3つの世界が一つになった瞬間。これこそが、マヤの人々が数千年も前から求めて来た、奇跡の瞬間だった。

地下世界を形成する聖なる泉・セノーテ。ここには、古代マヤの人々が信じ、求めて来た世界が、今も広がっている。



スペインの世界遺産 バルセロナ

五藤 克己（元文化放送記者）

バルセロナは快適な都市です。歴史的・文化的な厚みもさることながら、街並みの美しさは格別です。19世紀からの都市計画に基づくもので、街の景観に統一感があります。また世界有数の建築都市として、多彩な建築物が独特の趣を添えています。

1984年にアントニ・ガウディの作品群が、また1997年にカタルーニャ音楽堂とサン・パウ病院が、それぞれ世界の文化遺産に指定されました。

私の好きなガウディ作品はグエル公園です。なによりも入場無料というのがいい。各国から押し寄せる観光客の傍らには、散策におしゃべりとゆったりとした時間を過ごす市民の姿があります。ここを訪れたら、中央広場を囲む波形ベンチに座ってみてください。ガウディは人間の体にぴったり合うようにベンチを設計したので、実に座り心地がいいのです。ただ、いつも満席で、空きがなかなか見つかりません。

サグラダ・ファミリアについて口の悪い人は「世界でただ一つの有料工事現場」などと揶揄しますが、ここ数年の進捗状況には目を見張るものがあります。かつては「いつ完成するのかは誰にも分からない」とされていましたが、最近ではガウディ没後100年に当たる2026年の完成を目指していると言われています。

カタルーニャ音楽堂とサン・パウ病院は、いずれもリュイス・ドメネク・イ・モンタネールの作品です。この人は25歳でバルセロナ建築学校の教授となり、ガウディもその教え子のひとりでした。

音楽堂は外観だけでも十分に楽しめますが、ガイドツアー（少人数の予約制）で内部を見学することをお勧めします。大ホールの中央天井にステンドグラスの巨大なシャンデリアがあり、外光を巧みに取り入れています。彫刻やモザイクなどの室内装飾は「花の建築家」と呼ばれたドメネクならではの華麗さに満ちています。幸運にもコンサートのチケットが入手できたら、この音楽堂の本来の魅力を存分に味わうことができるでしょう。

サン・パウ病院は、総面積14万5千平米の広大な敷地に48棟の建物が並ぶ一大プロジェクトでした。ひとつひとつの建物は、まるでお伽噺に出てくるようなファンタジーあふれるデザインで、これが病棟だったとはとても思えません。建物同士は地下の廊下で自由に行き来でき、病院としての機能面でも当時の最先端の考慮がなされていました。「芸術には人を癒す力がある」というドメネクの信念が随所に活かされています。

最後にひとつ。旧市街の歴史地区、カテドラル前の広場では、日曜日の正午から、サルダーナという民族舞踏の輪がいくつもできます。フランコの独裁時代、カタルーニャ文化はひどい弾圧を受け、カタラン語さえ使用を禁じられましたが、その間も踊り継がれてきました。踊る人は年配者が多く、互いにつないだ手はカタルーニャ民族の団結の象徴だったようです。



グエル公園、上方が波形ベンチ



サン・パウ病院、各所で修復工事中



サルダーナ、後方はカテドラル